
バニーガール

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

バニーガール

【Nコード】

N7670D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

お金に困ってアルバイト先を親友和歌子に紹介してもらった真理奈。ところが何とそこはバニーガールの店。しかもそこに憧れの彼まで来て。ドタバタ恋愛ものです。

第一章

バニーガール

高橋真理奈はアルバイトを探していた。それもかなり実入りがい
いものをだ。彼女がそうしたアルバイトを探すのには彼女なりにれ
つきとした理由があった。

「お金が欲しいのよ」

「誰だつてそれは欲しいわよ」

クラスメイトの五十嵐和歌子がすぐに突っ込む。見れば二人共あ
まり背は高くない。真理奈はにこにことした顔立ちで目がいつも笑
っている感じである。色は白く長い黒髪を左横で束ねている。小柄
だが中々肉感的な身体つきをしているのが赤いブレザーと黒と青の
タートンチェックのミニスカートの制服の上からでもわかる。それ
に対して和歌子はすらりとした感じで髪は茶髪を上で束ねている。
こちらの目は少し釣り目気味であり人形に似た感じの顔をしている。
「誰だつてね」

「私は今特に欲しいのよ」

真理奈は和歌子の冷たい突っ込みに少し慥然として言葉を返した。
二人は学校の食堂で同じ天麩羅うどんを食べながら話をしている。

「特にね」

「そんなに欲しいの」

「訳ありなのよ」

そう和歌子に述べる。

「ちよつとね。色々とあつて」

「よかつたら話してくれるかしら」

何だかんだいって友人である。和歌子も真理奈が真剣なのを察し
てあらためて声をかけてきた。

「どうしてそんなにお金がいるのかしら」

「高谷君にね」

真理奈はここで隣のクラスのイケメンの男の子の名前を出してき
た。

「告白されちゃったのよ。それで受けて」

「デートでもすることになったの？」

「そう」

「ここのおのろけがはじまった。」

「それなのよ。お金が凄く必要なのよ」

「そんなのお小遣いでどうにかなるでしょ」

「ならないわよ」

すぐに和歌子に対して慥然とした顔を急に作って反論した。

「デートでね、遊園地に行つて喫茶店に行つて」

「猫の遊園地で一泊でもするつもり？」

「駄目かしら」

道理でお金が必要な筈である。真理奈はそれを本気で考えていた
のだ。高校生にしてはかなりの背伸びであると言えるものであった。

「はじめてのデートなんだし。それに」

「彼とホテルで一泊ね」

「そういうこと。だからどうしてもお金が必要なのよ」

「他の遊園地とラブホテルじゃ駄目なの？」

和歌子は高校生らしい背丈で言ってきた。

「それが普通だと思っけれど」

「普通じゃ駄目なのよ」

しかしそれでも真理奈の考えは変わらないのであった。

「だってはじめてだから」

「はじめてだと普通は安全牌でいくものだけれど」

和歌子は口ではこうは言ったが真理奈ののろけぶりに何か心が溶
かされた。それで一旦溜息を出した後で彼女に対して言うのであつ
た。

「あるわよ」

「そのアルバイトが？」

「ええ、一応はね」

「こう彼女に告げる。」

「あるにはあるわ」

「本当！？それじゃあすぐに紹介して」

「ただし」

「晴れやかな顔を見せる真理奈に対して告げる。」

「かなり恥ずかしいかもね」

「かなりって？」

「言っておくけれどギリギリで変なお店じゃないから」

「変なお店じゃないの」

「そう、ギリギリだけれどね」

和歌子はその釣り気味の目を鋭くさせて彼女に言うのであった。

だが言われている当の本人はその事情が今一つ掴めないでいた。

「それでもいいかしら」

「お金はいいのよね」

「それは凄くいいわ」

これははつきりと保障してみせた。

「ちよつと働いたらそれだけで猫の遊園地で一泊できるわよ」

「それじゃあそれでいいわ」

むべもなくそれを受ける真理奈であった。

「じゃあすぐに紹介して」

「いいわ。ただし」

「ただし？」

「制服で来ないことね」

「制服で？」

「そう」

何故かここで和歌子は念を押す感じになっていた。真理奈はどうして彼女がそうしてきたかわからなかった。だがそれでも彼女はそのアルバイトを受けることにした。どうしてもお金が必要であったからだ。

こうして彼女は私服で和歌子と待ち合わせてそのアルバイトの面接に向かう。和歌子はラフな青いジーンズと黒のジャケットで真理奈は淡いピンクのワンピースに白いコートである。真理奈はその服を和歌子に見せて問うた。

「この服でもいいわよね」

「そうね」

和歌子は彼女のワンピースを見て答えた。

「制服じゃなければ別にいいわ」

「そうなの」

「それにアルバイトの時は着替えるし」

「その服に？」

「ええ、そうなのよ」

こう真理奈に教える。

「じゃあ行きましょう」

「わかったわ。それじゃあ」

こうして二人は繁華街に向かう。真理奈はその繁華街に入って少し妙な感じを覚えたがそれでも和歌子について行った。そうしてそのアルバイト先とは。

「この前電話で紹介した娘よ」

「へえ、その娘がね」

何かスケベというか一歩間違えればロリコンではないかと思えるような雰囲気の中年の男が和歌子に応えていた。見れば店はやけに明るい。それは学校にあるような健全な明るさではなくかなり妖しい明るさであった。真理奈はその明るさを見て顔を顰めさせていた。があえて今は喋らなかつた。そうして和歌子とその男のやり取りを見ていた。男の服のポケットから見える携帯のストラップを見ながら。それは小さいアニメキャラのマスコット人形である。やはり口リっぱかつた。

「どうかしら」

「そうだね。いいと思うよ」

「いいそうよ」

和歌子は男の話を聞いて真理奈に対して言うのであった。

「このお店でアルバイトさせてもらえるって」

「有り難うございます」

真理奈は一応は男に対して頭を垂れて礼を述べた。それからこう
した時の決まり文句を述べた。

第二章

「私頑張ります」

「うん、頑張ってね」

男、おそらくこの店の支配人は外見よりは遥かに丁寧で紳士的に真理奈に応えてきた。どうやらロリ趣味はあるがそれでもまともな人間であるようだ。

「それじゃあすぐに服に着替えてもらおうよ」

「服ですか」

「そうよ。私も一緒よ」

和歌子はくすりと微笑んで真理奈に言ってきた。

「だから安心してね」

「安心して」

「ええと、君」

支配人が真理奈に尋ねてきた。

「はい？」

「名前は何ていったかな」

実はまだそれを言っていなかった。それで問われたのであった。

「よかつたら教えてくれないかな」

「高橋です」

まずは姓を名乗った。

「高橋真理奈です」

「そう、真理奈ちゃんだね」

支配人は真理奈の名前を聞いてにこりと笑った。それからまた述べてきた。

「宜しくね。あとね」

「何でしょうか」

「お客さんが変なことをしてきたり言ってきたらすぐに僕に言ってきて」

何故かここでは真剣な顔になるのであった。

「いいね。変なことは絶対にさせないから」

「はあ」

「支配人さんはいいい人だから」

そうして横から和歌子が言ってきた。

「それは安心していいわ」

「変なことって」

「それは後で話すわ」

今はあえて言わない和歌子であった。

「それじゃあ行きましよう。着替えにね」

「ええ」

何が何かわからないまま和歌子の言葉に頷くのであった。

「わかったわ。それじゃあ」

「すぐに仕事にかかってね」

二人に支配人が声をかけてきた。

「真理奈ちゃん研修扱いだからね、今日は」

「わかったわ」

それに和歌子が答える。こうして二人はまずはロッカールームでこの店の服に着替えるのであった。そして着替えてびっくり、真理奈はその服を見て顔を真っ赤にして和歌子に対して抗議するのであった。

「ちょっと、これって」

「何？」

「何？じゃないわよ」

そう和歌子に対して言う。

「これがこのお店の制服なのよ」

「これの何処が制服なのよ」

真理奈は口を尖らせて和歌子に抗議した。

「これが制服だったらブルマーも制服になるじゃない」

「また随分マニアックね」

和歌子は今の真理奈のブルマーという言葉に突っ込みを入れる。今頃ブルマーの学校もまずない。当然真理奈達の学校も半ズボンである。

「とにかくね、何なのよこれ」

真理奈はまだ抗議していた。

「バニーガールなんて聞いてないわよ」

「聞いてないのはあんたが悪いのよ」

和歌子はしれっとして言い返す。見れば二人は黒いバニーガールの格好をしている。頭には兔の耳をつけて網タイツにハイヒールである。見るからに、といった格好である。特に真理奈のスタイルはかなり肉感的でありスタイルがかわり際立っていた。高校生には見えない。

「そうでしょ？」

「そういう理由だったのね」

真理奈はここまで聞いてようやく話を理解したのであった。

「それでバイト料が高かったの」

「そういうこと。お金を稼ぐのは楽じゃないのよ」

和歌子はシビアな言葉を出してきた。

「これでわかったわね」

「わかったわよ」

今更だがそれを理解したのであった。

「けれど。お給料はいいのよね」

「それは安心して」

和歌子はそれは保障するのであった。

「伊達にこんな格好するわけじゃないんだからね」

「そうなの。けれど」

しかし彼女はここで一つ疑問があった。それもかなりのものであった。

「変なことされないわよね」

「それは安心して」

和歌子はそれについては太鼓判を押してきた。

「お客さんが変なことしてきたらね」

「ええ」

「ハイヒールで蹴ろうがひっぱたこうがいいのよ」

「いいの」

「ここは風俗店じゃないんだから」

「だったら何だとも思ったがここは静かに和歌子の話を聞くのであった。しかしそれでも真理奈の不安は消え去らないのであった。

「お店の人は大丈夫よね」

「支配人さん真面目だから」

「それも安心させるのであった。

「それは安心していいわよ」

「そうなんだ」

「あれであの人女子には優しいし」

「あつ、それはわかるわ」

「これは面接でわかった。一見するとスケベそうであるがそれはわかるのであった。

「紳士みたいね」

「少なくともお店の女の子に変なことはしないし変なことする人は許さないから」

「そうなの」

「それにこのお店暴力団お断りだし」

「そこも安心させるのであった。どうやら本当に真面目な店らしい。

「お店もただお客さんにコーヒーとか出すだけなのよ。言うなら」

「メイド喫茶みたいなもの？」

「そうね、同じだと考えていいわ」

和歌子はそれも保障するのであった。

「だから本当に変なことはされないしするって流れもないから。それも安心して」

「わかったわ。それもね」

「じゃあ安心してお金を稼ぎなさい」

ぼん、と真理奈の背を押して言ってきた。

「彼氏と猫の遊園地で楽しむ為にね」

「了解。それじゃあね」

「うん」

にこりと笑って和歌子に頷いた。そうしてお店でお客さんの相手をするのであった。

第三章

お店自体は真面目であった。彼女は安心してお金を稼いでいた。そうして数日経った。バイト料はかなりのものになっており彼女もそれに満足していた。

「上手くいってるみたいね」

「ええ」

真理奈は和歌子の言葉ににこりと笑って答える。

「もう少しでね。軍資金が貯まるわ」

「どう？ここかなり実入りがいいでしょ」

「ええ。この格好にも慣れてきたし」

自分のバニーガールの格好を見て笑う。苦笑いではなく本当の笑みであった。

「慣れればそれ程でもないのね」

「慣れればね」

それは和歌子も言う。

「何でもないでしょ」

「そうね。お客さんの視点は気になるけれど」

「それは見ないことにするのよ」

和歌子はそれは気にするなと言ってきた。

「いいわね」

「見ないことね」

「そんなのいちいち気にしていたらやっついてられないから」

それはいいというのであった。

「わかったわね」

「わかったわ。それじゃあ」

「今日も頑張って稼ぎなさい」

にこりと笑って真理奈に告げる。

「それでデートのお金をね。ゲットするのよ」

「わかったわ。それじゃあ」

「ええ。それじゃあね」

こうして今日も稼ぐのであった。しかしここで思わぬ出来事が彼女を襲うのであった。それもとびきりの奇襲であった。

いつものようにコーヒーを出す。それであるお客さんにそれを出そうとすると。

「何かな、この店」

「いい感じだろ」

そのテーブルの客は二人だった。見れば高校生か大学生であった。未成年かどうかは微妙な感じの外見である。

「たまにはな。こうした店に入るのもいいさ」

「御前の趣味がわからねえよ」

一方の男が相手に対して言っていた。

「メイド喫茶みたいなものだって聞いたからついて来たんだけどよ」

「同じだよ」

相手の男は言う。

「受けるサービスは同じさ」

「同じなのか」

「メイドじゃなくてバニーガールなだけさ」

相手の男の言葉はかなり醒めたものではあった。

「だからそんなに気にすることはないさ」

「俺メイド喫茶にも入ったことないんだけれどな」

彼は首を傾げて相手に答えていた。

「それでこんなのか」

「何だ、はじめてか」

「普通学生でこんなところに入るか」

声を響めさせて抗議していた。

「御前の趣味が大体わかったよ」

「本能的に忠実なだけさ」

それでも彼の態度は平然としたものであった。

「別に変なことをするわけじゃないしな」

「それでも。全く」

彼は呆れている感じであった。

「何で女の子にこんな格好させるんだか」

「需要と供給だよ」

「ここでも相手の声はクールなものであった。

「結局のところはな」

「その二つか」

「メイド喫茶だってそうだろう？」

「ここでメイド喫茶も出してきた。それを言つと反論のしようがなかった。」

「ああいう店があつたらいいって思うからあるんだろ？」

「そうなるな」

「そういうことだ。それでわかるな」

「わかつたよ。じゃあバニーガールもか」

「そういうことだ。これでわかつたな」

「わかつたよ。じゃあ皆バニーガールが好きなんだな」

「嫌いな奴がいるか？」

全く以つて身も蓋もない言葉であった。

「バニーガールが」

「いないと思うな」

これには彼も反論のしようがなかった。

「男のロマンだしな」

「体操服にセーラー、スクール水着、メイド、ナース、スチュウワ―デス、そしてこのバニー」

相手の男は実にマニアックであった。

「巫女もか。とにかくそれ等は全部男のロマンだ」

「ロマンになるんだな」

「そうさ。バニーガールに御主人様って言われるのは最高だぞ」

「御前もかなりえらい趣味しているな」
彼は思わず相手に突っ込みを入れた。

「マニアだろ」

「男は全員マニアだ。御前もだからここに来たんだろっ？」

「御前に誘われたからだ」

彼は無然とした声で言葉を返す。

「それにしても。ここの店の客は」

「どうかしたか？」

「どいつもこいつも鼻の下を伸ばしているな」

周りの客達を見て言う。それは言っても仕方ないことであるが。

「そんなにバニーガールがいいのか」

「メイド喫茶でもそうだぞ」

相手の男はここでも容赦のない言葉であった。

「デレデレとした顔をしているだろ」

「そういえばそうか。どうなっているんだ」

「だから男だからだ」

一言だがそれが実に哲学的な響きを持った言葉になっていた。

「それで充分じゃないか。ほら」

ここでバニーガールの姿を見たので彼に声をかけた。

「来たぞ、お目当てが」

「お目当てって何なんだ」

「何だっって言われてもな。一つしかないだろ」

相手の男の言葉は感情の響きすら乏しいものであった。

「バニーガールだ」

「だな。じゃあ見てみるか」

「ただ。一つだけ注意しておけよ」

また一つだけという言葉が出た。しかし今度は意味が違っていた。

「何だよ」

「絶対にセクハラはするなよ」

今までとは違って変わって真剣な顔で彼に対して言うのであった。

「したらすぐに袋にされて警察に突き出されるぞ」

「そこは厳しいんだな」

「当然だろ、風俗じゃないんだこの店は」

風俗であればそういうことはある程度以上は許されるということであつた。しかしあくまで風俗ではない。ここが非常に重要なのであつた。

「そこだけは違うからな」

「そんなことするか」

彼は口を尖らせてその言葉には抗議する。

「何処ぞの変態親父じゃあるまいしな」

「しかしそれも男のロマンでもある」

相手は不敵に笑つてそれも肯定するのであつた。

「バニーガールなりテニスウェアなり競泳水着なりレオタードなりエプロンなり浴衣なりな。それを少しづつそうしていくのみな」

「バニーガール以外はさつきと違うな」

「気にするな」

ここまで来ると殆ど変態にしか見えない。というよりは全然変態であつた。しかし相手のこの男はそれを全然平気なのであつた。

「それはな」

「御前他に店ではそうしているのか？」

「そういう店ではな」

しているのであつた。正真正銘の変態であつた。

「しているぞ」

「しているのか」

「イメクラは駄目だ」

しかしそれは駄目だと言つのであつた。

「あれは面白くはない。本番がないからな」

「おい待て」

今の言葉には彼はまた突っ込まずにはいられなかつた。

第四章

「御前まだ高校生じゃないか」

「ああ」

本人の言葉ではそうなるのであった。

「それで何で本番だ」

「それがないと何の意味もないだろ」

ここでも平気な顔をして言い切ってみせてきた。

「服装だけでなくそうした女の子と最後までいくのがな」

「犯罪じゃねえか」

「見つからないといいんだよ」

本人にしてみればそうなのであった。かなりとんでもない性格である。ついでに言えばその行動はさらにとんでもないのであった。

「その為に毎朝毎晩アルバイトしているんだしな」

「そこまでするか」

「するか。俺はそっちに命をかけてるんだからな」

「何時か洒落にならん病気になっても知らんからな」

一応はそう忠告する。

「そっなってからじゃ」

「そっちは大丈夫だ。ちゃんとゴムはして衛生は気をつけているからな」

「そっちは抜かりなしか」

「そういうことだ。まあこの店はこの店で楽しい」ということであつた。

「それで楽しめばいい」

「じゃあ付き合つてやるよ」

「是非共な」

そんな話をしている二人であつた。真理奈はそんな話を和歌子と共に聞いているのであつた。

「何か色々と話をしているみたいね」

「高校生らしいわね」

和歌子が真理奈に応えた。

「どうやら」

「このお店は高校生のお客さんも多いわね」

「ええ、そうなのよ」

こうした店では一応は年齢制限もあつたりするがそれでもあまり守られてはいない。それに関しては見て見ぬふりもあつたりする。

「まあ気にしないでね」

「わかったわ。じゃあ私が行くわ」

真理奈が言ってきた。

「コーヒー二つよね」

「わかった。それじゃあ御願いな」

「ええ。何か男の視線も慣れてきたわ」

くすりと笑って和歌子に言う。

「慣れればそれ程でもないのね」

「気にしないのが勝ちよ」

和歌子はそのバニーの姿で笑ってみせた。

「それは何度も言ってるわね」

「やっとそれがわかってきたわ」

真理奈もそれだけの度胸がついてきていたのだ。

「自分でも驚いているけれど」

「最初は誰だつてそうよ。けれど」

「それを乗り越えてつてわけね」

「そういうこと。それじゃあ」

また真理奈に声をかけてきた。

「頼むわね」

「わかったわ。全ては高谷君の為」

言葉と仕草に気合が入る。見ればうさぎの耳が揺れて右手を拳にしている。全てはその高谷君とねずみの遊園地に行く為であるから

当然であつた。

「やつてやるわ」

「そういうこと。私は他のお客さんのところに行くから」

「ええ。それじゃあそっちは御願いね」

「わかつたわ」

そんな話をしながらコーヒを二つお盆の上に置いて持つて行く。そうしてお客さんの前で言う言葉は。

「お待たせしました、御主人様」

「はい」

二人のその高校生と思われる客は真理奈に顔を向けて応える。ところが。

「えっ!?!」

「なっ!?!」

真理奈もそのうちの一人もお互いの顔を見て驚きの声をあげた。あげずにはいられなかった。その理由は他ならぬ二人が次の瞬間に自分達自身の声で言ってしまった。

「高谷君!?!」

「君は」

何とマニアと話していたのは高谷君なのだった。そしてその高谷君が出す次の言葉は。

「高橋さん!?!」

「どうしてここに」

真理奈は目を白黒させてその高谷君に問う。

「いるのよ」

「高橋さんこそ」

二人はそれを否定せずにお互いに対して問うていた。これは肯定に他ならなかった。

「どうしてこんなところに」

「そ、それは」

咄嗟に何と云えばいいのかわからない。相手の男も高谷君の向か

いの席で呆然としていた。

「何があつたんだよ、一体」

「確かここって高校生はアルバイトできないんじゃないか」

「そ、それは」

真理奈は高谷君の問いに反論できなかった。とてもそれが可能な心理状況ではなかったのだ。

「その……」

「それにその格好」

高谷君はさらに言う。

「どうしてバニーガールに」

「た、高谷君だって」

動転したまま真理奈も言う。最早言葉にも問いにもなっていないが。

「バニーガール見につて。どういことよ」

「いや、これは」

「こんな嫌らしいお店に。どういつもりよ」

自分の価値観を高谷君につぶけるのだった。もう何が何なのか周りにも自分達にも全くわからない状況になり果ててしまっていた。

第五章

「どういって」

「不潔よ、不潔」

今時珍しい言葉を出す真理奈であった。

「どういってもりなのよ」

「そういう高橋さんだって」

売り言葉に買い言葉の調子で高谷君も言い返す。

「どうしてそんな格好しているんだよ」

「それはその」

「僕はただ付き合ってたのに」

「えっ!？」

「そつだよ」

それまで黙っていた相手の男が高谷君の言葉で少し言葉を止めた
真理奈に対して言ってきた。

「俺が無理にって連れて来たんだよ」

「そつだったの」

「そつだよ」

高谷君は憚然として真理奈に答えた。

「メイド喫茶みたいなものだからって言われて来たんだよ」

「そんな・・・」

「こいつそういうのには真面目でね」

相手の男はここでも苦笑いを浮かべて真理奈に言う。

「本当は嫌いなんだけど俺が無理にって連れて来たんだよ」

「それを早く言ってくれば」

「その前に問い詰めてきたのはそっちじゃないか」

高谷君はそのいい形の唇を尖らせて言うのだった。

「全く。困るよ」

「御免なさい」

「それより高橋さん」

形勢は完全に真理奈にとって不利になっていた。高谷君は目を少し怒らせて彼女に問うてきたのだ。

「聞きたいことがあるんだけど」

「ええ」

「どうしてここにいるの？」

聞きたいことはやはりそれであった。

「どうして？何でなの」

「それは……」

まさかここで言える筈がなかった。他ならぬ高谷君の為だからだ。真理奈はその高谷君を前にしておろおろとするばかりであった。

「言えないの？」

「それはその」

視線も泳ぐばかりだ。どうしていいかわからない。そうしてただ戸惑ってばかりいるところに和歌子がやって来た。そうして真理奈と高谷君の間に入るのであった。

「はい、そこまで」

「和歌子」

「君も確か」

「御主人様、そうしたサービスはこの店にはありませんよ」

にこりと笑ってこう言うのであった。

「サービスって」

「御主人様は御主人様です」

その言葉で今にも動こうとしていた店の人達を止めてみせたのである。

「ですからクラスメイトとかそうしたことはセーラー喫茶に行つて下さいね」

「セーラー喫茶って」

「そういう店もあるんだよ」

高谷君の連れであるその相手の男がここで言う。どうやら彼はそ

うした店もチエック済みであるらしい。

「そこじゃこんなサービスもあるんだよ」

「そうだったのか」

これまた高谷君の知らない世界であった。さらに驚くばかりであった。

「そんなのまで」

「おわかりになられましたか、御主人様」

その連れの男の援護射撃を受けて和歌子はまた高谷君に言ってきた。

「ここは御主人様として。寛大に御願います」

「わかったよ」

高谷君も分別はある。ここで騒ぐのはよくないと冷静になってわかったのだ。そうして今は。和歌子のその言葉に従うことにしたのであった。

「それじゃあ」

「コーヒーおかわりは如何ですか、御主人様」

和歌子はさらにその場を取り繕う為に高谷君達に言ってきた。それまで無意識のうちに立ち上がって真理奈を問い詰めていた高谷君も何とか気を鎮めて座っていた。

「それじゃあもう一杯」

「僕はいいよ」

連れの男はその申し出を受けたが高谷君は断った。

「これでね」

「何だよ、気分を悪くしたか？」

「まあね」

それは否定しなかった。

「どうにもこうにも」

「そうか。なら仕方がないな」

彼も高谷君のその言葉を聞いて納得するのだった。

「じゃあそれでいいさ」

バニーガール

「悪いな」

「いや、悪いのは俺ぞ」

ここで相手の彼は自分が悪いと言っただった。

第六章

「無理に誘ったせいでこうなったんだからな」

「いや、それは」

「もう無理には誘わないからな」

そうしてこう言ってきた。

「これ以上はな」

「そうなのか」

「今日のことは忘れるなつて言っても無理だろうがな」

流石にそれを言うのは図々しいと思うのだった。

「それでもな。実際のところ」

「気にしないさ」

高谷君も彼の心境を察して言葉を返した。

「だから気にしないでくれよ」

「悪いな」

二人は後味の悪いコーヒーになったがとりあえず気を鎮めていた。

だが真理奈と和歌子の方はそうはいかなかったのだ。

「もう終わりじゃない」

真理奈は店の奥の倉庫で大泣きだった。泣いて泣いて仕方がない有様だった。

「高谷君とのデートの為だったのにその高谷君と」

「確かに痛いわね」

心配して側にいる和歌子が彼女に言う。倉庫の中には二人の他に誰もいない。ダンボールの山が積み重ねられているだけである。

「まさか彼まで来るなんて」

「折角お金が溜まってもこれじゃあ何の意味もないじゃない」

真理奈は泣き続けたまま言う。

「どうしたらいいのよ。お金があっても仕方ないわよ」

「落ち着いて」

しかし和歌子はここで真理奈を落ち着かせるのだった。そつと彼女の両肩を抱いて。

「ここはね」

「落ち着いてどうにかなるの？」

真つ赤になった目でその和歌子に問う。

「もう完全に終わりじゃない。どうすればどうにかなるのよ」

「私に任せて」

しかし和歌子はそれでも言う。

「上手くいくから」

「いくの？本当に？」

「私に任せて」

和歌子は優しい声で真理奈に囁いてきた。

「絶対に上手くいくから」

「本当に？」

「ええ、確実にね」

彼女の言葉には強さがあつた。全てがわかっているような。

「上手くいくわよ」

「高谷君と？」

「そうよ。だから安心して」

また真理奈に囁く。

「安心していいから。真理奈は」

「高谷君とデートできるの？」

そのことだけを考えていた。それだけに彼女も必死だった。その必死な顔で和歌子に対して問うのだった。まるで神様にすぎるように。

「それで」

「そうよ。真理奈は何の心配もいらないから」

「嘘じゃないわよね」

「私が嘘を言うことがあるかしら」

和歌子の言葉は何時になく真剣だった。その真剣さは真理奈にも

伝わった。

「ないわよね」

「え、ええ」

和歌子その言葉に対して頷く。

「だからよ。真理奈はこのまま待ってればいいから」

「待ってれば」

「それだけでいいの」

和歌子の声が穏やかなものになった。

「わかったわね。任せて」

「わかったわ。それじゃあ」

真理奈も和歌子のことはわかってる。だからこそその親友なのだ。そして真理奈は友人を信じるタイプだ。それなら、と決めたのであった。

「御願いな」

「ええ。一週間経ったらね」

「一週間ね」

「それだけあれば充分だから」

「そうも言ってみせる和歌子であった。」

「任せてね」

「ええ」

こうして真理奈は一旦は落ち着いていた。そうしてアルバイトを再開するのだった。とりあえずお金は溜まっていく。しかしだ。彼女は心の中に不安を抱き続けていた。

「和歌子なあ言ってくれているし」

「とりあえずは和歌子を信じていた。しかしそれでも。」

「上手くいくのかしら、本当に」

不安の理由はそれであった。どうしても上手くいくとは思えなかったのだ。その相反する気持ちのなかでせめぎ合っていたのだ。

「高谷君と。デートを」

あれこれ考えているうちに一週間経った。すると和歌子が彼女に

声をかけてきた。

「今日よ」

「一週間よね」

「ええ。それでね」

和歌子は言う。

「お店に来て欲しいのよ」

「お店に？」

「そういうこと。いいわね」

真理奈に対して告げるのだった。

「それだけでいいから」

「お店に行くだけでいいのね」

「真理奈はね」

また真理奈に言うのだった。

「それだけでいいから」

「私はそれだけでいいって」

何か引つ掛かるものがあった。真理奈も目をきよとんとさせてそれから首を捻る。

「どういうことなのよ」

「少なくともハッピーエンドは期待していて」

彼女は真理奈にこう告げて安心させた。

「わかったわね」

「ええ」

何が何なのかわからないまま和歌子の言葉に頷く。

「それで上手くいくのなら」

「一つ言っておくことがあるわ」

和歌子はここで真理奈に静かに告げてきた。

「何を？」

「女の子が必死に誰かの為にすることは全部正しいのよ」

珍しくくすりと笑ったうえでの言葉であった。

「特に好きな人の為にすることはね」

「そうなのよ」

「そうよ」

そう真理奈に答えた。

「それが神様が女の子に与えてくれた最大の贈り物なんだから」

「贈り物って」

「必死にすることが正しくなるってことよ」

和歌子はまたそれを真理奈に告げた。

「いいわね。それを信じればいいのよ」

「じゃあ今は」

「安心してお金稼ぐのよ」

和歌子が言いたいことは結局のところそれであった。

「今はね。わかったわね」

「わかったわ。それじゃあ」

まだ不安が心の中を支配していたがそれでもであった。真理奈も
頷くことにした。

第七章

「とりあえずは。お店で働いていくわね」

「お店の人も気にしていないからね」

「そうかしら」

それにはかなり疑問符がつくことを否定できなかった。

「そうは思えないけれど」

「あの程度のトラブルは日常茶飯事だから」

和歌子はしれっとして言ってきた。

「全然平気よ。だから気にしなくていいのよ」

「日常茶飯事なの」

「冗談抜きで変なお客さんだっているしね」

これはある程度真理奈もわかった。あんな格好をしていれば当然おかしな客もやって来るだろ。それは容易に想像のつくことであった。というよりは彼女は彼女も最初それをかなり警戒していた。だからこれはすぐにわかるのであった。

「だから平気なのよ」

「そうよね、やっぱり」

「一週間、とにかく真理奈は考えなくていいから」

また極端に楽天的と思えることを言ってきた。

「わかったわね。考えるのは猫の遊園地のことだけでいいわよ」

「ねずみのね」

「そう、それだけ」

安心させるように告げる。

「わかったら。さあ」

「ええ」

親友の言葉にこくりと頷く真理奈であった。

「わかったわ。それじゃあ」

「恋にもお金がいるのよ」

和歌子らしい言葉であった。

「わかったら気合入れて稼いでね」

「わかったわ。けれど和歌子」

「何かしら」

「恋にもお金がいるのね」

彼女が今度聞くのはそこであった。

「やっぱり」

「当たり前じゃない」

和歌子の返事は何を今更、といった感じであった。

「地獄の沙汰も金次第って言うじゃない」

「地獄のって」

「恋も同じよ。進むも退くもね」

「どちらでもなのね」

「お金は絶対に必要なものよ」

それをまた言ってみせてきた。

「何事においてもね。恋もまた然り」

「愛だけじゃ駄目なのね」

「愛がないと恋でも何でもないわ」

それはわかってている和歌子であった。しかしそれだけでどうとなるわけでもないというのだ。かなりシビアで現実的な意見であった。

「それでもお金がないと動かないものでもあるのよ」

「そうした意味なの」

「そういうこと。わかったらまずは稼ぐのよ」

ここまで話したうえで話が元に戻った。

「いいわね」

「わかったわ。じゃあ高谷君の為に」

「頑張りなさい」

そう言っですと微笑んでみせてきた。

「一週間後のハッピーエンドとそれからの新たなストーリーの為にね」

「そうね。頑張るわ」

真理奈も心の中にあつた不安を消して答えた。

「高谷君とデートするんだから」

こう言つて六日の間まずは必死に頑張つた。お金はそれだけの分が貯まつた。そうして運命の一週間後。真理奈はまずはお店にやつて来たのであつた。

「今日よね」

「そうよ」

二人はロッカールームで私服からバニーの服に着替えていた。その中で話をしているのだ。

「いよいよつてやつね」

「そうよね。けれど」

真理奈はその高校生らしいミニスカートと淡いピンクのブラウスを脱いで下着姿になる。見れば淡い青の可愛らしい下着だ。それに対して和歌子は紫のかなり派手なものである。

「大丈夫かしら」

ここできて不安が心の中を支配する真理奈であつた。

「本当に」

「だから大丈夫よ」

和歌子は真理奈にこう告げながらその紫の下着を脱いでいく。白く整つた身体が姿を現わす。

「もうあちらには言つてあるし」

「高谷君に？」

「他に誰がいるのよ」

逆にこう聞き返してきた。

「いないわよね、他には」

「まあそうだけれど」

和歌子のその言葉に頷く真理奈であつた。彼女もその淡い青の下着を脱いでいく。胸は彼女の方がかなり大きい。実はお店でもそれが評判になっている。

「それでも」

「大船に乗った気持ちでいなさい」

そんな真理奈に対して言ってきた。

「安心していいから」

「いいのね」

「私は嘘は言わないわ」

その言葉には威勢のよさまで加わっていた。

「絶対にね。だから本当に安心していいから」

「じゃあそうさせてもらうけれど」

「それでよ」

和歌子はまた言うのだった。

「猫の遊園地の予約の方はどうなったのかしら」

「一応は上手くいったわ」

バニーガールの服専用のサポーターを身に着けながら答える。かなりカットが深いので専用のものでなければ駄目なのである。

「そう、よかったじゃない」

「ちゃんと二人用にしたらから」

「ここまで和歌子に答える。」

「だからそれはまずはほっとしているけれど」

「そのほっと具合は半々ってところかしら」

和歌子はそう分析してみせてきた。彼女はもうサポーターの上から網タイツを着けていた。そこからさらにバニーの服を着ていくのである。

「安心と不安の割合が」

「よくわかったわね」

「大体予想はつくわよ」

「こつ真理奈に答えてみせた。」

「その顔を見ればね。真理奈ってすぐに表情に出るから」

「そうだったの」

「ええ。だからわかりやすいのよ」

くすりと笑って述べてきたのであった。

「色々だね」

「じゃあ今までも」

「そうよ。すぐにわかったわ」

穏やかな笑みで真理奈に言ってきたのであった。

「色々だね」

「色々となの」

「そうよ、自分では気付かなかったみたいね」

「実はそうよ」

自分でもそれを認める真理奈であった。

「そうだったの」

「素直ってことね」

しかし和歌子はそれをよしとしてきた。

「それって」

「そう考えてくれるのね」

「私はね」

もうバニーの服を着ている和歌子であった。そうして腕の小さい袖を着けていた。首や頭の飾りと共にバニーガールの衣装には欠かせないものである。

第八章

「真理奈のいいところだと思っわ」

「そう言ってもらえると嬉しいわ」

「それにね」

和歌子はさらに言ってきた。

「ずっと不安が続いていたでしょ」

今度言ってきたのはそれであつた。

「この一週間」

「それも顔に出ていたのね」

「そうよ」

それもはつきり言われる真理奈であつた。彼女は和歌子より服を着るのが少し遅い感じでやっと網タイツを着け終えたところであつた。

「今まで黙っていけれど」

「黙っているなんて酷いわ」

そう述べて少しむくれてみせた。

「今まででも」

「あえて言わなかったのよ」

それが和歌子の返事であつた。

「そうだったの」

「だって。今日じゃないと駄目じゃない」

和歌子はまた言う。

「今日ハッピーエンドになるのに」

「和歌子は全然安心しているのね」

真理奈もそれはわかつた。和歌子が高谷君とのことになんか安心していることに。

「だから。女の子が好きな人の為に必死にやるってことはそれだけで絶対に正しいのよ」

「それ前から言っているわよね」

真理奈はそれに突っ込みを入れる。

「けれど。そうなの」

「そうよ」

またにこりと笑って言う真理奈であった。

「正しいことは実るわ。安心してね」

「じゃあ。安心していいのね」

「私が言っているから大丈夫よ」

これはいささか根拠のない話に思えたが真理奈はどうにも突っ込むことができなかった。

「わかつたわね」

「わからないと駄目なのね」

「そういうこと」

結局のところはそういうことであった。

「まあそれもケースバイケースだけれど」

「その正しいってことね」

やっと制服を着終えた真理奈は問うた。既に和歌子は飾りも全部着け終えてしまっていた。やはり着るのがかなり早かった。

「浮気は駄目よ」

「そうよね、やっぱり」

これは真理奈も同意であった。しかも完全に。

「一人の人を好きになっただらとことんまでよね」

「そうじゃないと値打ちがないのよ」

和歌子はこうまで言う。

「だから。いいわね」

「高谷君も最後までね」

「それは絶対に貫くこと。いいわね」

和歌子の言葉が厳しくなった。見ればその目も。

「それさえ守れば正しいのよ」

「ええ。じゃあ今日も」

「頑張りなさい」

和歌子の声が優しくなった。

「いつもよりもね」

「いつもよりなのね」

「それはお店に出ればわかるから」

頭の耳から首や腕の飾りに移っている真理奈に対して告げた。

「その理由が」

「それも信じるのね」

「今だけでもいいから」

和歌子は不意に言ってきた。

「信じてもらえればいいわ。私の言葉」

「いつもじゃないわ」

今度は真理奈の言葉の調子が変わってきた。強くなってきたのだ。

「いつもじゃないって?」

「そうよ。だって」

そうしてその強い言葉で言っているのである。

「それは今までってことよね」

「そうなるわね」

真理奈のその言葉に頷いた。

「それじゃあ嫌よ。これからも」

それが真理奈の和歌子への願いであった。

「これからも御願い。それじゃあ駄目かしら」

「いいわ」

真理奈のその言葉ににこりと笑う和歌子であった。

「真理奈がそう言うのならね」

「悪いわね。何か図々しいけれど」

「いいのよ」

しかしそれを受け入れる和歌子であった。

「それはね。気にしないで」

「有り難う」

そしてそれにまた礼を言う真理奈であった。

「それじゃあいつもよりも」

「ええ、頑張つてね」

また真理奈に声をかけた。

「ハッピーエンドの為に」

「お店に出ればハッピーエンドが待っている」

「そうよ」

そこを強調してみせる。

「だから。すぐに出て」

「わかったわ。それじゃあ」

「ええ」

着替えながらのやり取りを終えて店を出る。するとすぐに支配人から声がかかってきた。

「あの、真理奈ちゃん」

「はい」

「お呼びがかかってるよ」

支配人は穏やかな声で真理奈に言ってきた。

「わかりました。それでどちらの」

「三番の方だよ」

そう真理奈に言う。

「コーヒーね。すぐ持つて行って」

「はい、それじゃあ」

「けれど。真理奈ちゃんつて人気あるんだね」

支配人はそのことを喜んでるようであった。

「何よりだね、うん」

「人気ですか」

「人気があるのに越したことはないよ」

実を的を得た支配人の言葉であった。

「バニーガールじゃなくてもね」

「そうなんですか」

「そうに決まってるじゃない」

支配人の笑顔が明るくなる。こうして見ると一見好色そうなのにそれが好人物に見えるから不思議であった。真理奈もその顔を今見ていた。

「人気がないとね。人として寂しいよ」

「ですか」

「特にね。一人の人から人気がある」

支配人の声が少し真面目になった。

「それが一番大事かな」

「つまりそれってあれですよね」

この話は真理奈にもわかった。

「好かれているってことよね」

「愛だよ」

また支配人には少し似合わない言葉であった。

第九章

「愛だから、これは」

「愛、ですか」

「愛は大切にしてね、真理奈ちゃんも」

支配人の笑顔がさらにいいものになった。こうしたお店には少し似合わないのではないかと思える程のいい笑顔であった。

「それをちゃんとわかっているのとわかっていないのとで全然違うからね」

「わかりました。じゃあ今は」

「その人気を大切にして。さあ」

話が接客のそれに戻った。

「コーヒー御願いね」

「はい。では行って来ます」

「うん」

こうして彼女はコーヒーをテーブルの上に置いて指名のテーブルに向かった。そうしてコーヒーをお客さんの前に置くと。動きが止まった。

「えっ……」

「うん……」

そこにいたのは高谷君だった。照れ臭そうに、恥ずかしそうにそこに座っていた。

「どうしてこのお店に」

「あのさ」

高谷君はその照れ臭そうな笑顔で真理奈の顔を見てきた。そうして言うのであった。

「ここでアルバイトしているのってあれだったんだね」

「あれって」

「遊園地に行く為だったんだね、僕と」

真理奈をじつと見ながらの言葉であった。

「それでここで。アルバイトしていたんだ」

「どうしてそれを」

「話、聞いたから」

この僅かな言葉だけで充分であった。真理奈は誰が高谷君に話をしたのかわかった。だからハッピーエンドになるのだと。その言葉の意味も今わかったのだった。

「それでだったんだね」

「それは……」

「言わなくてもいいよ」

高谷君にはもうわかっていた。だからもう言葉はいらなかったのだ。

「それはね」

「いいの」

「うん、いいよ」

そう言っただけから先は言わせなかった。

「それより。御免ね」

今度は謝ってきた。

「今まで気付かなくて。それで酷いこと言っただけ」

「いいわ」

今度は彼女がこう言う番であった。穏やかで優しい声で。

「それは。気にしていないから」

「そうなんだ」

「それよりね」

そして真理奈は言うのだった。

「遊園地だけれど」

「一緒に行つていいかな」

言ってきたのは高谷君の方からだった。

「それは」

「私が言いたかったんだけれど」

今の言葉は。そうなのだった。

「今の言葉は」

「そうだったの、御免」

「けれど。いいわ」

こくりと頷いて答えてきた。それは否定はしないのだった。

「いえ、一緒に行つて」

そうして言葉を訂正する。

「私と遊園地に。御願い」

「僕の方こそ」

高谷君も真理奈に御願いするのだった。

「一緒にね。御願い」

「ええ。二人でね」

「うん」

一週間前のことはもう許されて流されていた。そうして二人でこれからのことを想うのであった。それは今もうはじまっていた。

「ところでさ」

「何？」

話は変わっていた。

「遊園地はあそこだよね」

「ええ、猫の遊園地」

そこは絶対であった。もう予約も取っていたのだ。

「予約してあるし」

「もうなんだ」

「そこで。いいわよね」

「悪いわけではない」

高谷君はくるちと笑って言ってきた。

「それじゃあ。そこでね」

「ええ、御願い」

そう言葉を交えさせてこの店では終わった。だがこれは終わりではなく本当の意味での始まりだった。真理奈も高谷君もそれはわ

かっていた。

高谷君にコーヒーを渡してテーブルから離れる奥に戻ると。そこには和歌子がいた。腕を組んで楽しげな笑みを真理奈に対して見せていた。

「上手くいったみたいね」

「ええ」

真理奈はにこりと笑って和歌子に答えた。

「貴女のおかげだね」

「実る恋は実るのよ」

真理奈の御礼に対してこう返す和歌子であった。

「そういうものなのよ」

「そうなの」

「そうよ。だから私はちよつとそれを訂正しただけ」

だから彼女はそれを誇ってもいないのだった。

「それだけだから」

「けれど。それでも有り難う」

それでも礼を述べる真理奈であった。

「おかげで助かったわ」

「それで。遊園地でだけれど」

「ええ」

話はそこに向かった。

「もう兎じゃなくなるのよ」

「えっ!？」

真理奈は今の和歌子の言葉にその顔をきよとんとさせた。

「それってどういうこと？」

「だから。猫じゃない」

それをまた言う。

「だからよ。今度は猫になるのよ」

笑って真理奈に言ってきた。

「だから。いいわね」

「そうね、猫なのね」

「うさぎはもうおしまい」

そういうことであった。

「わかったら今度は猫になるのよ」

「ええ。けれど何か」

ここで微妙な顔になる真理奈であった。

「どうしたの？」

「不思議ね。今はバニーガールも悪いものじゃないって思えるようになってきているわ」

「ハッピーエンドだったからよ」

そう真理奈に告げる。

「よく言うじゃない。終わりよければ」

「全てよしね」

「そういうこと。わかったらさあ」

「猫になるわ、これからはね」

「それでよし、よ」

最後に和歌子のにこやかな顔が出た。これでハッピーエンドは完成であった。終わってみると話は大団円であった。何事も終わりよければ全てよしであった。

バニーガール 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7670d/>

バニーガール

2009年7月1日21時19分発行